
とある学園都市の悪魔

ITEM

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある学園都市の悪魔

【Nコード】

N4254BA

【作者名】

ITEM

【あらすじ】

超能力者でありながら聖人という常識外れな力を持つ少年、神鬼大和。

彼は裏の世界では知らぬ者なしと恐れられる『学園都市の悪魔』

神鬼 大和

人気のない暗い路地裏を一人歩く少年がいた。

その身長、その童顔から見て中学生ぐらいだろうか。

細長い針のような物を右手の指でクルクルと器用に回しながら、退屈そうに歩く少年の後方から突然何かが飛んで来る。

ヒュン、という金切り音と共に凄まじい速さで少年の頭部に向かっているのは釘だった。

だが少年は振り返ることなくまるで後ろにも目が付いているかのよう^{レジスタント}に頭を横に傾け釘を躲した。

「不意打ちかア！ 絶対排斥も随分とせけエ真似すんだなア！」

少年は前を向いたまま後ろにいるであろう釘を飛ばした犯人を挑発する。

少年は手に持っていた細長い針、『千本』を後ろに向けて投げた。人間が投げたとは信じられない速さで放たれた千本は何か金属に当たったのか、カン！ という音を立てて地面に落ちた。

「・・・相変わらず化け物みてえな力してやがる。俺の釘を弾き飛ばすとはな」

「聖人の力舐めるなよ。テメエの首なんざ木の枝みてエに折れんだけ？」

少年は拳をボキボキと鳴らしながら引き裂くような笑みを浮かべる。
釘を放った少年、ライエは警戒心を高める。少年が拳を鳴らすのは
目の前にいる自分を明確な敵と認識した合図だからだ。

つまりー知り合いだからという手加減はもうないことを意味する。

「安心しな。殺しやにしねエよ。だけど・・・」

首をゴキゴキと鳴らしながら少年は言った。

「ちィとばっか遊ばせてもらうぜ」

言い終わったのと同時に少年は一気に距離を詰め、そのままライエ
に蹴りを放つ。

「っ!??」

爆発的なスピードで放たれた蹴りを受けたライエは後ろに吹き飛ん
でしまう。

「ゲホッ、ゲホッ!!」

能力で壁と激突した衝撃はなんとか相殺したがモロに入った蹴りの
ダメージから激しく咳き込む。

「汚エなア。咳きすんなら手で押さえてしろよなア」

余裕の笑みを浮かべながら少年は言った。

「クソガキが・・・!!」

「おー怖い怖い。そオ睨む・・・なつて!!」

少年は再び蹴りを放つ。ライエはなんとか躲したが次はないだろう。爆発的なスピードの蹴りは先程までライエがいた壁を粉々に粉碎する。

「つーかなんでテメエはオレを襲ったんだよ？ まさか死神みてエな殺人鬼に転職でもしたのかア」

「綾季の事だ!! てめえがあいつを『裏の序列』（ブラックリスト）のトップに推薦したのはわかってんだよ!!」

ライエは凄まじい殺意を秘めた目で少年を睨み付けながら怒鳴った。

「てめえならわかってる筈だ!! あれのトップになった奴が、どうなるかぐらい!!」

「もちろん知ってるさ」

「だったらどうして!？」

「はアゝライエ君。テメエはなんにもわかってねエなアゝ」

少年は大きな溜息を吐きながら呆れたように言った。

「テメエはアイツがただのお花畑な超能力者（レベル5）だと思ってるのか？」

「どついつ事だ・・・!!」

「アレはデメエが思ってるほど無害な化け物（レベル5）じゃねエ
って事だア」

「ふざけるなああつ!!!」

ライエは斥力を全開にして少年に迫る。

そのままライエは少年の顔面に向かって拳を放った。

目にも留まらぬスピードで放たれた拳は確かに少年の顔面を捉えた。
本来なら首は吹き飛ぶ筈。しかし少年は痛がる素振りすらみせずこ
う言った。

「痛ってエなア」

少年はライエの右手を掴むと骨を折った。

「ぐ、ぐあああああつ!!!」

折られた右手を押さえながらライエは思わず蹲った。

少年はそのスキを逃す筈もなくライエの腹に蹴りを入れる。

凄まじいスピードで後ろに吹き飛んだらライエはそのまま壁に激突
する。

痛みでうまく演算出来なかったせいかわかぬが、激突の衝撃を完全には相殺出
来ず、前と後ろの両方から激しい痛みが襲う。

「大能力者（レベル4）風情が、来易くオレに触れてんじゃねエよ」

少年は倒れているライエの首を片手で掴むとそのまま持ち上げた。

「ぐう・・・！！」

ライエは少年の手を掴みながら必死に抵抗するが微動だにできなかった。

「最高にムカついた。このまま首の骨、へし折ってやるよオ」

少年が手に力を入れようとしたその時だった。

少年に向かって何やら黒っぽいものが襲いかかった。

少年はライエを放り投げると横っ飛びでそれを躲す。

少年を襲ったそれは――影のようなものだった。

「子供の喧嘩にしちゃあやり過ぎだぞ」

路地裏に新しい声が響く。

「それぐらいにしとけ。これ以上やるなら、俺もライエに加戦するぞ」

「相変わらず上から目線でムカつく野郎だ。ブツ殺すぞ、クソ暗根が」

そつは言っても少年には目の前にいる人物を殺すことは出来ない。

彼の名前は常闇^{とこやみなおと}直人。

少年がこの街で絶大な信頼を寄せている数少ない人物。

「いいのかな？ そんな口の利き方して」

「ああ？」

「華芽に言い付けるぞ。お前がライエを殴った、って」

華芽という名前が出た途端、少年はビクツと反応した。

「・・・すみませんでした」

湧き上がる殺意を必死に抑えながら少年は常闇に謝罪した。

「よろしい」

常闇は微笑みながら言った。

「クソツタレが・・・！」

少年は人間離れた脚力で建物の屋上まで飛び上がるとそのまま学園都市の闇へと消えて行った。

少年の名前は神鬼大和。裏の世界では知らぬ者なしと恐れられる『学園都市の悪魔』

天界人救出作戦（前書き）

よろしければ感想お願いします

天界人救出作戦

「ただいまア」

マイホームに帰って来た大和は帰宅の挨拶をする。するとリビングに通じるドアがバーン！と開き、ドタドタとちっこい何かが大和に向かって走って来た。

「おにーちゃん！！ おかえりなさい！！」

元氣過ぎる声を出しながら大和に豪快なダイブをかましたのは神鬼^{かみき}百^{もも}。

大和が以前、暗部の仕事で潰した研究所から助けた実験台の置き去り（チャイルドエラー）だ。大和は訳あって彼女を義理の妹として引き取っている。

「遅くなって悪いな。イイ子にしてたかア？」

大和はモモの頭を優しく撫でながら言った。

「とつてもイイ子でしたよ。ねっ、モモ」

モモの代わりに答えたのは神鬼撫子^{かみきなでこ}。大和は双子の妹である。

「モモの世話、ご苦労だったなア撫子」

「いえいえ。今日は空さんと圭さんとショッピングに行ったんですよ」

「なるほどねエ。そオ言えば撫子、見かけねエ靴があんだが誰か来てるのかア？」

大和は普段はない見かない靴を確認して撫子に尋ねた。

「土御門さんが来てるんですよ」

それを聞いた瞬間、大和の周りの空気が変わった。一瞬のことだったので撫子と大和に抱き付いているモモは気付いてはいない。

「そオか。で、土御門の野郎はどこにいった？」

「大和さんの部屋にいますよ」

「土御門お兄ちゃんね！ いっぱいモモと遊んでくれたの！」

「そオかよ。悪イがモモ、アイツに会って来るから離れてくれ。撫子、モモを頼む」

少し元気のなくしたモモを撫子に任せると大和は自室に向かう。中に入ると土御門が寝っ転がっていた。

「にゃー大ちゃん。おそかったじーガッ！？」

土御門が話し終える前に大和は寝っ転がっていた彼の首を掴んだ。

「デメエ・・・どオいうつもりだア」

ギリギリと力を込めながら大和は尋ねた。

「言つた筈だ。オレの家には近付くな、って。まだ懲りてねエみてエだなア」

呼吸が出来ないのか土御門は大和の手をパンパンと叩き、離せと伝える。このまま頃してもよかつたのだが後々面倒になると判断した大和は土御門の首から手を離れた。

大和の拘束から解放された土御門は激しく咳き込みながら新鮮な空気を吸う。

「い、いきなりは酷いぜよ……。大ちゃん」

まだ苦しいのかハアハアと荒い呼吸をしながら土御門は言った。

「なんの用だア。くだらねエ用だつたらブツ殺すからな」

大和は鋭い眼差しで土御門を睨みながら言った。

「実は大ちゃんに頼みたいことがあるんだなにやー」

「ああ？ テメエが人の頼み事するなんざ珍しいなア。で、なんだよ？」

「んー、大きな声では言えない事だから外行こうぜい」

口調こそいつも通りのふざけたものだったが明らかに土御門の雰囲気が変わった。

それを敏感に感じ取った大和は、

「・・・オーケー、外に行こか」

素直に土御門の指示に従った。

「ここなら誰にも聞かれることはねえだろ」

大和と土御門がいるのは路地裏の一番奥。遅い時間だけにこの辺りを縄張りになっているであろうスキルアウトの姿もない。

「で、オレに頼みたいことって？」

「実は大ちゃんにはある人物を保護して欲しいんぜよ」

「保護だと？ オイオイ、明らかに頼む相手が間違ってたんだろ。そ
おいうのは常闇とかに頼めよ」

「いやそうもいかないぜよ。なにせ暗部関連の仕事だからにゃー」

そう言いながら土御門は大和に保護対象についての資料を渡す。

「保護対象の名前はフィロ。詳しくは知らないが空から墮ちて来た
天界人とからしい」

「天界人？ なんだそりゃ？ 第二位みてえにデメエまでメルヘン
思考に成り下がったのかア」

大和は呆れた表情で土御門に言った。

「最初は俺も冗談だと思ったんだけどにゃー。どうやらそうでもないらしい」

「あア？」

「資料の続きを見てくれ大ちゃん。それを見たら大ちゃんも少しは信じる筈ぜよ」

どこか釈然としないが大和は言われるままに資料をペラペラと捲っていく。数枚ほど捲ったところで大和の手が止まった。

それは数日前に第十九学区で起きた謎のクレーター発見事件の詳細だった。だが大和の目に留まったのはその隣のデータ、クレーター発見の数時間前に衛星が捉えた巨大な歪みのデータだった。

「どうやら大ちゃんも俺と同じところに目がいったみたいだにゃー」

大和の行動を見透かしたかのように土御門が言った。

「こりゃかなりデケエ歪みだなア。何が原因だ？」

「それがよくわかってないんぜよ」

「あア？ これだけの歪みだ。原因は限られんだろうオが」

「分析班も最初はいくつかの仮説を立てたんだけどにゃー。どれもこれも空振りに終わったんぜよ。だけど・・・天界人の落下による

反動と考えればクレーターの件と合わせて説明がつく」

「かなり無理矢理な説明だぜ？　そもそも天界人が落下したつつう証拠も根拠もねえだろ」

「確かに大ちゃんの言う通りぜよ。だが、上の連中はそうは思っていないらしい」

土御門はサングラスをクイッと上げながら言った。

「上の連中がどんな仮説で天界人と結びつけ、その写真の人物を見つけたかはわからない。だが事実、暗部が既に動き始めている」

「あア？　暗部かが？　なんの目的で」

学園都市は科学の街だ。天界人なんていかにもオカルト臭いものに手を出す理由が大和にはまるでわからなかった。

「さあ？　上の連中が考えてることなんて俺にはわからないぜよ。だが一つハッキリしてるのは・・・」

土御門は一呼吸置いて言った。

「またロクでもないことを考えてるのは確かだ」

「・・・違いねえなア」

大和は資料を丸め、ズボンのポケットに突っ込むと土御門に尋ねる。

「今動いてる暗部はどこだア」

「『アイテム』だ」

「・・・あのババアのいるところかア。問題ねエ、第四位なんざ相手にもなりやしねエよ」

大和はニヤリと歪んだ笑みを浮かべながら言った。

「オーケー引き受けてやるよオ。その代わり、例の事・・・頼むぜ」
「常闇華芽の能力の隠蔽だろ？ 了解したにやー」

そう言い残し土御門は闇に消えていった。

くまがわみぞれ
球磨川霽は長点上幾の図書館にいた。彼はその特異な能力を買われ学園都市一の名門校の中等部に所属している。

ペラペラと分厚い本のページを捲りながらレポート制作の最中だ。

「よオ霽。相変わらず真面目にレポート制作かア」

断りもなしに球磨川の隣にドカツと座ったのは彼の親友である大和だ。大和も球磨川と同じ長点上幾の中等部に所属しているが全く登校していない。

『あれ？』『珍しいね大和ちゃんが学校に来るなんて』『もしかしてやっと登校する気になったの？』

「んな訳ねエだろ。今日来たのは『仕事』の話があるからだア」

『・・・なるほどね』『今回はどんな内容かな？』『皆殺し？』
『それとも研究所破壊？』

物騒な単語ばかりが出てくるが大和は首を振って否定する。

「今回は人探しと保護だア」

『人探しと保護？』『大和ちゃんにしては随分とヌルい仕事引き受けたね』

球磨川は不思議そうに首を傾げた。

「まアな。ここで話せる内容じゃねエ。場所を変えるぞ」

『もう少しで終わりそうだから先に入り口で待っていてくれないかな？』

「オーケー。じゃあ先に行ってるぜ」

そう言っただ和は席を立ち、先に入り口へと向かった。

場所が変わりここは学園都市の暗部組織の一つ『スクール』の隠れ家。『スクール』のリーダーであり学園都市の第二位でもある垣根帝督は忌々しそうに仕事の内容が書かれた資料を投げ捨てた。

「気に食わねえな。ああ実に気に食わねえ」

明らかに怒りの籠った声で垣根は吐き捨てるように言った。

「そうしから？ 内容の割には羽振りのいい仕事じゃない」

赤色の派手なドレスを身に纏った少女がなだめるように言った。

「ギャラの問題じゃねえ。この俺をイカれた科学者引つ張り出す為のダシに使うとは舐めてやがる」

余程気に食わないのか、垣根は近くにあった椅子を思いつ切り蹴飛ばした。

「まあいいじゃない。中学生1人襲ってこのギャラよ。今回はボinasって考えましょう」

「下衆みてえな能力しか使えねえと一緒の考えなんざ出来るか」

今度は机を蹴飛ばしながら垣根は言った。

ドレスの女は垣根が投げ捨てた資料を拾い上げた。

「それにしても可哀想な子ね。まさか愛しいお兄さんのせいで、自

分が狙われてるなんて夢にも思っていないでしょうね」

気持ちなど微塵も籠っていない同情の言葉を口にする。

「この俺の、学園都市の第二位の垣根帝督のプライドを傷付けた野郎だ。粉々に殺してやる・・・！」

忌々しそうに垣根はハッキリと抹殺宣言をした。

資料に書かれていたのは大和の友人の名前。

資料には・・・「折原 空」と書かれていた。

竜守 綾季

しばらくすると球磨川が図書館の入り口に向かって来た。どうやら無事にレポート制作が終わったらしい。

『お待たせ大和ちゃん』

「いや、そんなに待ってねエよ」

『まあ大和ちゃんが来た時にはほとんど終わってたからね』

「そオカよ。にしても腹減ったなア。先に昼飯とシヤレ込むか」

大和は腕時計で現在時刻を確認しながら提案した。

『そうだね』『僕もちょうどお腹空いてきたし』『先にお昼ご飯食べよう』

「オーケー。じゃあとりあえずファミレスにでも行くかア」

歩き出した大和に球磨川が続いた。

「ほらよ。今回の『仕事』の資料だア」

しばらく歩いて大和が球磨川に仕事内容の書いたファイルを渡した。

「飯食ってから説明しよオカと思ったんだが面倒くさくなった。と

りあえず最初のページに映ってる野郎探し出して保護するのが今回の内容だア」

『この子かい？』『でもまたなんで？』

「知らねエよ。土御門の野郎が考えてることなんざ知りたくもねエ」

『土御門くんからの依頼？』『へえ、珍しいね』

土御門が大和と球磨川に頼み事することなどほとんどないだけに意外だった。

『でもまたなんで大和ちゃんに？』『搜索とか保護なら大和ちゃんじゃなくても出来るのにね』

「今回の件には『アイテム』のヤツらが絡んでいる。まア多分ヤツらとは戦闘になるだろオナア」

『なるほどね・・・』『確かに第四位が相手なら大和ちゃんを起用した理由になるね』

球磨川は不敵な笑みを浮かべながら言った。

「まア暇潰しぐれエにはなんだろ。第四位ブツ殺すことなんざ欠伸するより簡単だからなア」

『殺したらダメだよ大和ちゃん』『後々面倒なことになるから・・・』

学園都市の能力者の頂点に君臨する超能力者が死ねば、とんでもな

い騒動になるのは目に見えている。

「わかってるよオ。せいぜい死なねエ程度に遊んでやる」

『ということは搜索は僕一人でやるのかい？』

「いや、搜索対象が対象だけにかなり面倒くせエことになりかねない。搜索はオレもやる。だが一緒にじゃなくて別々で行なう。効率良くいくぞ」

今回の相手は天界人とかいう得体の知れない相手だ。恐らく本人も自分が誰かに追われていることは薄々気付いているだろう。『アイテム』の連中に先に発見でもされたら面倒なので別々に探した方がいいと判断したのだ。

だがそれ以上に面倒なのは・・・

『一般人に発見されたらかなり厄介だよね・・・』

そう自分達でも『アイテム』でもなく、先に一般人に発見されることだ。

生憎この街にはツンツン頭の天然タラシ野郎やツンデレのビリビリ中学生を筆頭にドの付くお人好きが多い。

そんなヤツらが対象を先に見つけたらどうする？ 十中八九事情を聞いてそのまま保護するだろう。

そうなれば対象を引き離すのはかなり面倒だ。最悪その場で戦闘になりかねない。

長年学園都市の闇に身を置いている二人にとっても関係のない者達を巻き込むことだけはどうしても避けたかった。

「流石にそオすぐに見つかるとはねエと思うが急いだことに越したことはねエ。昼飯食ったら早速搜索を開始するぞ」

『わかったよ』『今回は別の意味で骨が折れそうだね・・・』

冬の寒い風が吹き付ける中、半袖半パンという明らかに季節外れな格好で学園都市の道を歩く少女がいた。

彼女の名前は竜守綾季。大和達によって隠蔽こそされているが彼女も超能力者（レベル5）の一人だ。

彼女は大和にボコボコにされた同居人のライエのお見舞いの帰りだ。もちろん綾季はまさかライエが入院した原因が弟のように慕っている大和であることは知らない。

「モーライエったらいつつ綾季に秘密する！　今回も何も教えてくれなかったし・・・」

一人でブーブーと文句を垂れているうちに綾季はあることに気が付

いた。

「あれ？　ここ、どこだろう・・・？」

何時の間にか路地裏に入り込んでしまったらしい。

携帯を取り出そうとカバンの中を物色するが、

「病院に忘れてきちゃった・・・」

唯一にして最大の救い主である『携帯電話』がない綾季は完全に手詰まりとなった。

「どうしよう・・・。と、とりあえず歩こう」

とりあえず進めと自分に言い聞かせ綾季は再び路地裏を進み始めた。

しかしいくら歩いても出口らしいものは見つからずそれどころか、
どんどんと路地裏という迷路に迷い込んでしまった。

「うう・・・全然帰り道がわからないよ・・・」

路地裏は昼間でも暗い。過去のある出来事から暗くて狭い所が大の
苦手である綾季にとって路地裏は最悪の所だった。

「うう、ライエ・・・大和・・・」

綾季は思わず二人の名前を口にする。入院中のライエが助けに来る
筈もなく、となれば頼れるのは大和だけだった。

「大和お・・・前にみたいに、助けてよ・・・」

以前今回と同じ様に路地裏に迷い込んだ時は大和が助けてくれた。普段は子供のような大和だが、あの時ばかりは自分よりも年上のお兄さんのように感じた。

「うう、怖いよお・・・。助けてよお・・・」

何時の間にか泣き出してしまった綾季はペタンとその場に座り込んでしまった。

と、その時だった。暗い路地裏に誰かの足音が響いた。

「大和!？」

綾季は思わず声を上げた。だが返事はない。綾季は勢い良く立ち上がると足音のした方へ走り出した。足音にどんと近付いていつてるのを感じた綾季はさらにスピードを上げる。

（あの曲がり角の向こうからだ!）

そう確信した綾季は勢い良く角を曲がった。

だがそこで綾季の目に飛び込んできたのは、

「な、なに? これ?」

地面に蹲る数人のスキルアウト達だった。うめき声を上げてるのを見る限り、死んではいけないようだ。

そしてそのスキルアウト達を中心に立っているのは、真っ白い髪と肌に現代的な杖、首にチョーカー型の電極を巻く青年だった。

白い青年は綾季に気付いたのかゆつくりとこちらを向いた。暗闇で怪しげに光る赤い眼を持つ青年、学園都市の第一位の一方通行がそこにはいた。

一方通行は鋭い眼差しで綾季を睨み付ける。

睨み付けられた綾季は蛇に睨まれた蛙のごとく縮こまってしまった。

「なんだデメエ？　こんなところで何してやがる」

「あ、あなたこそ・・・何してるの？」

質問を質問で返されたことにイラッとした一方通行はさらに鋭い眼差しで綾季を睨み付けた。

「聞いてンのこつちだア。舐めてンのかデメエ」

明らかに敵意の混じった声で一方通行は言った。

「あ、綾季、道に迷っちゃったの・・・」

ビクビクしながら綾季は答えた。その態度気に食わないのか一方通行はさらに責め立てる。

「なにビクついてンだコラ。いきなり会うなり失礼な野郎だなアデメエ」

間違ってもお前のせいだとは言えない。そんなこと口にすれば間違

いなく何かされる。

流石の綾季でもそれぐらいはわかった。

「ご、ごめんなさい・・・」

「なんで謝ンだよ？」

一方通行はイライラしながら吐き捨てるように尋ねた。

「・・・・・・・・」

ついに綾季は黙り込んでしまった。

流石に申し訳ないと思ったのか一方通行は綾季の頭を撫でながら尋ねる。

「で、確かに迷子だったなア。出口まで連れて行ってやつから泣き止め」

「あ、ありがとう！！」

世にも珍しい一方通行の申しでを受けた綾季は満面笑みでお礼を言った。

「ホラ行くぜ。さっさと来い」

そう言つて先に歩き出した一方通行の跡を慌てて綾季が追おうとしたその時だった。

ガツ、と物音が聞こえたのだ。一方通行はチャーカーのスイッチに手を伸ばす。

（さっきの雑魚共の残りかア？　　まったく面倒くせエなア）

だが一方通行の予想に反して次はドサツと人が倒れるような音が聞こえた。

「あつちだー!!」

綾季にも聞こえたのか音のした方へ走り始めた。自分が迷子であることを忘れて。

「オイちよつと待て!!　　テメエはコウモリか!!　　面倒くせエエエツ!!」

杖を突いている一方通行では健康な綾季のスピードに追い付ける筈もなくどんどん距離が開いていった。

「面倒くせエメスガキだア!!」

一方通行がチャーカーのスイッチをオンにしようとしたその時、明らかに周囲の空気が変わったのを感じた。

（暗部か？　　イヤ・・・にちゃあ空気が重過ぎる）

一方通行はスイッチをオンに能力使用モードへと切り替える。

とその瞬間、突然路地裏の先から大量の水が一方通行に向かって押し寄せて来た。

だが一方通行は特に慌てることなく『ベクトル変換』で水を逆流させる。

「・・・大能力者（レベル4）風情の雑魚がこの俺にケンカ売ってたアな」

「いやいや、それはあくまで書類上の強さであって本当は超能力者（レベル5）かもしれないよ」

路地裏の先から子供の声らしきものが聞こえた。

「ハッ、負け惜しみかア？ テメエみたいなカスが超能力者（レベル5）な訳ねエだろ。寝言は寝てから言いやがれ」

「・・・相変わらずのムカつく言い方だね。だから君達『グループ』とは仕事したくないんだよ」

さつきとは違って怒気の混じった声が返って来た。

「お互い様だろ？ 俺だってテメエなンざ同じ空気吸ってるかと思うと吐気がするぜ」

一方通行は近くに落ちてあつた鉄パイプをチョンと蹴った。すると鉄パイプはロケットのようなスピードで声が聞こえる方へ飛んで行く。

バシャン！ と水が弾くような音が聞こえたかと思うとバラバラに切断された鉄パイプの残骸が一方通行の前に転がった。

「君がボクのクライアントじゃなかったら殺してるよ一方通行・・・！」

「土御門のヤツがいなけりや
ながまつおおきみ
テメエなンざスクラップにしてるぜ、
永松大王」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4254ba/>

とある学園都市の悪魔

2012年1月13日13時45分発行